

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲



昼休みは近くの新宿御苑で弁当を食べ、将棋をしていた。

● 設計事務所創立

野生司建築設計事務所から解雇された私は、東大闘争弁護団を担当していた三原橋法律事務所の仙石由人弁護士のを借りて解雇無効の裁判を起し、勝訴し、退職金や和解金を手に入れた。3年に及ぶ解雇撤回闘争中、専門工事会社やメーカーなどの図面作成のアルバイトをした。

これで家族を養え、設計事務所では知ることができない知識を得ることができた。

1975年5月、この和解金を元手に、建築設計事務所を開設した。私は32歳になっていた。

一方、その後、野生司建築設計事務所は部長以上の管理職を集めて、図面や契約書類を事務所から持ち出そうとした。労働組合の切崩し解体を狙っているのは明白であった。

残業中の組合員がこれを察知し緊急動員をかけて阻止し、会社側と話し合いを求めて職場占拠・自主管理闘争に突入した。労働組合は10年以上、経営陣に話し合いを求め、野生司義章会長は海外に逃亡した。事業所を失った経営陣は自己破産した。

当時、建築家の下に弟子入りし腕を磨く設計事務所のイメージが根強かった。徒弟奉公的な建築事務所には、近代的な「労使間関係」とは相容れないものがあった。

大規模開発が増え続け、建設市場が世界最大規模に拡大する状況に対して、アトリエ型事務所では、量的にも質的にも対応しきれなかった。超高層建築、工業生産化する巨大建築などは振動解析等ハイテック化する構造設計者や建築設備・電気設備技術者、インテリアデザイナー、街造りプランナーなどの専門家と分業化した組織を統括するコーディネーターが求められていた。

労働争議が各所で起こっていた。横浜の創和建築設計事務所、四谷の桜井設備事務所、大阪の三座建築設計事務所。若山旅人建築設計事務所では今井俊一さんが奮戦していた。

日本が世界最大の建設市場に成長する過程で建築設計

事務所にも改革、再編が迫られていた。

私は靖国通りに面する新宿区富久町の酒屋の鉄骨造倉庫の2階に5坪ほどの事務所を借りた。外苑西通りと靖国通りの交差点に面し、信号が変わるたびに車のブレーキで建物は揺れた。時々、激しいブレーキ音と共に交通事故や救急車のサイレンが窓先に観察された。

同じ部屋に他で解雇された設備技術者や電気設備士、意匠建築士などが同居し、家賃を出し合い、お互いの電話番号をした。皆の共通の事務所の名前は「共同設計」であり、私の事務所の名前は「共同設計・五月社」と称した。共同設計・A社、共同設計・B社と夫々勝手に称する事務所は、その後13社まで増えた。大谷幸夫さんが目指した建築家組織「設計連合」とは理念も異なるが、既存の設計事務所からはじき出された技術者のネットワークが自然に形成された。

事務所を始めた私に新築の設計依頼はなかったが、設計図や施工図の作成依頼が多く、結構食べていけた。それぞれ勝手に仕事を探してきては楽しくこなしていた。

弁当を持って近くの新宿御苑に出かけ、昼休みにのんびり将棋をした。

今でも毎年、花見の季節になると元所員たちにも声をかけて新宿御苑の園遊会を企画している。

事務所を訪問するメーカーの営業マンは、「全共闘の活動家を雇用したせいで野生司建築設計事務所は倒産した」との業界情報を、まことしやかに話してくれた。

仲間たちは「3ヶ月で事務所倒産の危険性がある」と脅した。3ヶ月たってもギブアップしない私を見て、今度は3年が危ない。3年目が倒産する危険性が高いと予測した。だが3年過ぎても共同設計・五月社は倒産せず、30年以上持ちこたえている。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所主宰。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。